

聖書：マタイ 5：33～37

説教題：真実な神の前で

日時：2018年4月15日（朝拝）

イエス様は20節でこう言われました。「わたしはあなたがたに言います。あなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の御国に入れません。」この律法学者やパリサイ人の義にまさる義とはどういうものなのか、イエス様は21節以下で、当時の律法学者やパリサイ人の教えと対比する形で述べておられます。すでに「殺してはならない」、また「姦淫してはならない」という戒めについて見て来ました。今日のテーマは「偽りの誓いを立ててはならない」ということです。まず33節で当時、どのように教えられていたかが述べられています。「また、昔の人々に対して、『偽って誓ってはならない。あなたが誓ったことを主に果たせ』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。」この教えの背景となっている旧約聖書の御言葉はいくつか考えられます。レビ記19章12節：「あなたがたは、わたしの名によって偽って誓ってはならない。そのようにして、あなたの神の名を汚してはならない。わたしは主である。」民数記30章2節：「男が主に誓願をするか、あるいは、物断ちをしようと誓う場合には、自分のことばを破ってはならない。すべて自分の口から出たとおりのことを実行しなければならない。」申命記23章21節：「あなたの神、主に誓願をするとき、それを遅れずに果たさなければならない。なぜなら、あなたの神、主は必ずあなたからそれを要求し、こうしてあなたが罪責を負うことになるからである。」これらをまとめて33節のように、イエス様がいた当時、教えられていました。この言葉を見る限り、問題はないように思えます。しかしイエス様は34節から「しかし、わたしはあなたがたに言います」と始めて、神の子としての權威を持って正しい解釈について述べて行きます。この言葉に聞く時に、当時の教えの問題は何だったのか、33節を読むだけでは分からない問題が見えて来ます。その問題とは何でしょうか。それは当時の人々は律法学者やパリサイ人らの教えに従って色々なところを指して誓っていたということです。天を指したり、地を指したり、エルサレムを指したり、さらには自分の頭を指して。なぜそうする必要があったのでしょうか。一つには神の御名を直接用いることへの恐れがあったということがあったかもしれません。十戒の第三戒に「主の名をみだりに口にしてはならない」とあります。ユダヤ人はそのため、神の名を直接使うことを控えました。そこにはある意味で正しい姿勢が含まれています。しかしもしそれだけのことなら、イエス様がこのように否定的な発言をされるはずはなかったでしょ

う。ではこの誓いの問題は何だったのでしょうか。それは後の 23 章を参照するとよく分かります。23 章 16 節：「わざわざだ、目の見えない案内人たち。おまえたちは言っている。『だれでも神殿にかけて誓うのであれば、何の義務もない。しかし、神殿の黄金にかけて誓うのであれば、果たす義務がある。』」 18 節：「また、おまえたちは言っている。『だれでも祭壇にかけて誓うのであれば、何の義務もない。しかし、祭壇の上のさげ物にかけて誓うのであれば、果たす義務がある。』」 すなわち当時の人々はこのようにして誓いの間に巧妙な区別を設けていました。誓いの形式を取ることによる利益は確保しつつ、それを守らなかった場合でも大丈夫とするための抜け道を作っていた。神の名を直接用いたら誓いを破った場合の罰は免れません。しかし神の名に代わるものを用いるなら、その義務や罰から逃れられる。こうして彼らの誓いは偽善的なものになっていたのです。さらに大きな問題は、その彼らの偽善に神が協力させられていたということです。一見、敬虔なそぶりを見せつつ、実際には神を都合良く用いていた、神への恐れが全くなかった！ということです。

そこでイエス様は言います。天にかけて誓ってはいけません。地にかけて誓ってもいけない。エルサレムにかけて誓ってもいけない。あなたの頭にかけて誓ってもいけない。それらはすべて神が造られたこの世界の中にあるものであり、神に言及しています。神の名を直接使っていないからいいということにはならないのです。

さて、このイエス様の言葉は今日の私たちにどのように適用されるべきでしょうか。まず考えたいことは、イエス様は 34 節で「決して誓ってはいけません」と語っておられますが、これは文字通り、一切の誓いを禁止した言葉なのかということです。歴史の中ではそのように理解した人々もいました。有名なのはアナバプテストと呼ばれる人々です。聖書をすべて字義通りに取る傾向を持つ人々です。あるいはクェーカー派と呼ばれる人々は今日も法廷でも一切の誓いを拒否するそうです。またこれらの派に属する人々でなくても、時々、これはイエス様の言葉であり、イエス様がこう仰っているのだから、私は誓いをしませんと語る人に出会う時があります。聖書の言葉をどこまでも絶対的なものとして受け止めて従って行こうとする姿勢は素晴らしいのですが、聖書は文字面だけ取ると間違ってしまう。前後関係や聖書全体との調和の中で理解し、実践して行く必要があります。

誓いが一切禁止されているのでない根拠は聖書に多くの実例があることです。旧約で

はアブラハムが息子イサクの嫁探しのために最年長のしもべを遣わす際、主の名で誓わせています。またヤコブやヨセフは臨終の前に自分の遺体を約束の地に葬るようにイスラエルの子らに誓わせています。ダビデとヨナタンは、お互いに契約を結び、誓っています。新約でもパウロはたとえばⅡコリント 1 章 23 節で「私は自分のいのちにかけて、神を証人にお呼びして言います」と誓っています。そしてイエス様ご自身、法廷で誓いを求められた時、拒否しませんでした。さらに神ご自身が多くの箇所で、「わたしは自分にかけてちかう」と言っています。ウソ偽りが全くない世界では誓いは不要ですが、人間の墮落以降、この世界には罪や偽りが横行しています。そのような中で誓いを通して神の御前で互いの真実を確かめ合うことは、偽りが益々横行することの歯止めになるものですし、聖書が認め、奨励して下さっていることです。

実際、私たちも重要な場面では誓いをしています。すぐ思い起こすのは結婚式の誓いです。新郎新婦となる二人の誓約こそ結婚式を中心です。なのに「私はイエス様が誓うなどと言っているから誓いません」とか、「絶対破らないとは言えないから誓えません」などと言って、誓約抜きの結婚式をしたらどうでしょう。それは重みと厳粛さに欠ける軽いものになると思います。また洗礼式や信仰告白式、長老・執事就職式等でも誓約がなされます。あるいは一般社会における様々な契約も誓いの一種であり、正当なものでしょう。

そのことを踏まえつつ、イエス様がここで言わんとしていることを良く汲み取りたいと思います。イエス様が「決して誓ってはいけません」という言葉で語っておられることは何でしょうか。それは誓いの形式を取らなくても、いつも真実のみを語るように！ということではないでしょうか。イエス様は誓いそのものを完全否定しているわけではありませんが、誓う必要がないように歩め！と言っておられるのだと思います。私が思い起こすのは私が育った石巻の家では、まさにこの「誓い」に相当する言葉があったことです。それは「神様の前で？」という言葉です。初めは兄弟喧嘩などをして、父の前で叱られたり、問われたりする時に使われたと思います。私たちはそこで言い訳や自己弁護をしますが、父に「神様の前で本当か？少しのウソもないか？」と問われる。そのように神を証人にお呼びして誓わせられると、やはりウソは言えない。この言葉は石巻の阿部家では威力があったので、兄弟同志の間でも何か相手の言っていることが怪しいと思うと、良く私たちは「神様の前で？」「神様の前で？」と言い合いました。するとそれまでは少々ごまかしたことを言っていたても、ウーとかアーとか言葉に詰まって、結

局は本当のことを言わなければならない。時々、自分に都合が悪くなると、「その言葉はなし！」などと言ったものです。しかし時々思ったものです。「神様の前で」と問われたら本当のことを言わざるを得ないが、そう問われなければ、多少ウソをついても良いのだろうか。決してそうではないのですが、人間はそういう方向をじっくり考えてしまう。

私たちは果たしてウソについて良い時とダメな時を分けてしまっていないでしょうか。たとえば「ウソも方便」という言葉があります。英語ではホワイトライ、白いウソ、悪意のないウソという言葉もあります。多くの人は特別な罪意識も感じず、その種のウソを自分勝手な理由で肯定しています。しかしもし国際的な取り決めごとにおいて、ある国の大使がウソをつき、後から「あれはウソの方便だった」などと語ったらどうでしょうか。とても認められないでしょう。その国は大嘘つきだ、不誠実な国だ、とあらゆる人々から非難されるでしょうし、私たちも非難するでしょう。ところが私たちは日常生活で、時と場合によって多少のウソを肯定し、許容している。テレビでは消費者を欺く様々な偽装事件が報道されます。そのニュースに接して、これはひどい偽りだ！信頼を裏切るものだ！と騒ぎ、義憤を示している私たち。その私たちが何と日常の会話において、夫婦や親子や友人との会話において、これくらいのウソはと言って軽々しくついていることでしょうか。「ウソはいけない」というのは当然のことですが、私たちもまた色々な理由や条件を付けて、こういう場合はこの程度のウソは許される、などと言い逃れできるケース、許容できる状況を設定し、自分自身、それを行っているのではないのでしょうか。とするなら結局、パリサイ人と同じようなことをしていることにならないのでしょうか。

そんな私たちに対してイエス様が 34～36 節で言っていることは、どこであろうと私たちは神の御前で生活しているということです。天とか地とかエルサレムとか自分の頭といった区別を設けて、それによって語る言葉の真実さの度合いに違いがあって良いのではない。この世界は神が造られた世界であり、その中に住む私たちは常に神の御前にあります。その神の御前にある者としての自覚を持って言葉を口から出す者でなければなりません。

イエス様は最後 37 節でこう言います。「あなたがたの言うことばは、『はい』は『はい』、『いいえ』は『いいえ』としなさい。それ以上のことは悪い者から出ているのです。」

私たちはついつい言葉を足したくなります。ただ「はい」と言うだけでは物足りない。信じてもらえそうにない。それで大げさに色々な言葉を足し、修飾して、信用性を高めようと図る。「いいえ」もそうです。単純な言葉では十分でない。何か疑わしく思われそうな気がする。そう思って色々言葉を足す。しかし実はそうして言葉を足すことによって私たちは自分の言葉を軽くしているのです。自分の言葉がどうも軽いと思って、私たちは言葉を足すのですが、そうすればそうするほど私たちの言葉は益々軽くなっていく。伝道者の書5章はこう勧めます。「神の前では、軽々しく心焦ってことばを出すな。・・ことばを少なくせよ。・・ことばが多ければ愚かな者の声となる。」言葉が多くなるだけ、私たちのことばは軽く、中身の無いものになります。むしろ「はい」は「はい」とだけ言うこと、「いいえ」は「いいえ」とだけ言うこと。その方が重みがあるでしょう。イエス様はその単純な正確さを求めているのです。それ以上のことは「悪い者から出ている」と言われます。すなわちそこにはサタンの影があるということです。単純・明快・正直に語らない時、そこには偽りの父である悪魔の姿が見え隠れしている。何と恐ろしいことでしょうか！私たちの言葉は果たしてこの光に照らしてどうでしょうか。

ですから私たちは「はい」は「はい」、「いいえ」は「いいえ」とだけ語る者でありたいと思います。ごまかしなく、真実な言葉で、正直に生きる者でありたい。しかしどうしたらそのような歩みができるのでしょうか。最後に二つのことを述べて終わりたいと思います。一つは私たちの神はあわれみ深い神であることを仰ぐということです。この山上の説教の最初の5章3～4節は「心の貧しい者は幸いです」、また「悲しむ者は幸いです」と始まりました。すなわち貧しい者、どうしようもない者、罪深い自分であることを認めて神の恵みによりすがる者を、神は決してお見捨てにならない。むしろ豊かにあわれんでくださる。ですから私たちは自分で自分を守らなくて良いのです。神の前にあわれみ自分を正直に認めて、この神によりすがれば良いのです。本当は知らないのに、無理をして知っている振りをしなくていいのです。知らないことは知らないと言っているのです。ウソをつくより、真実を語った方がいい。また自分が過ちを犯した時もそうです。私たちは自分を繕うためにウソにウソを重ねやすいものです。しかしそうするより、率直に真実を認め、神のあわれみに委ねる方がいい。私たちの信じている神は、このようなあわれみ深い神、贖いの神であることを見上げる時、私たちは、「はい」は「はい」、「いいえ」は「いいえ」とだけ語り、神の前で誠実に生きる道を選ぶように導かれるのではないのでしょうか。

そしてもう一つはこの取り組みのゴールをしっかりと見据えるということです。それはこの章最後の 48 節にあります。「ですから、あなたがたの天の父が完全であるように、完全でありなさい。」 とてつもない目標です。無理です！不可能です！という叫びが聞こえてきそうです。しかしこれは人間が神のかたちに造られたと聖書に述べられていることの帰結です。私たちは神になるわけではありませんが、神ご自身を最終的に映し出す者とされます。そこに向かって前進することが聖書の語る救いです。ですからこの大きな文脈の中で今日の御言葉を捉えて言えることは、今日の御言葉の基礎は何よりも神ご自身が真実な方であられるということです。神は私たちに約束をくださいました。ご自身の御子を救い主として遣わすと。それは神にとってどんなに痛みを伴う出来事だったのでしょうか。しかし神は約束を真実に守ってくださいました。もし神が一度言われたことを撤回したり、計画をしょっちゅう変える方だったら、私たちに救いはありませんでした。しかし神は真実、その御言葉はどこまでも信頼できるものです。それは神の御子キリストも同じです。I ペテロ 2 章 22 節に「キリストは罪を犯したことがなく、その口には欺きもなかった」とあります。もしイエス様が「ウソも方便」で語られたら、私たちがこの方を全面的に信じることはできませんでした。しかしイエス様は最後まで偽りが一切ありませんでした。聖霊なる神もそうです。聖霊は真理の御霊です。私たちに真理のみを証しされます。ですから私たちがもし真理に反することを語るなら聖霊は悲しまれます。果たして私たちの言動を振り返って、この聖霊を悲しませていることはないでしょうか。

この世ではこの世をうまく渡って行くための様々な知恵、テクニック、処世術が教えられています。しかし私たちのゴールはこの世をうまく渡って行くことではありません。私たちのゴールは父なる神に似る者とされることです。神の子どもの特性をいよいよ発揮していくことです。私たちは私たちが救ってくださった真実な神を見上げ、感謝して、この方の前で「はい」は「はい」、「いいえ」は「いいえ」とだけ語る者でありたいと思います。単純で明瞭で信頼できる言葉のみを口から出し、そのことにおいて天の父の子どもであることを現わして行く者であるように。そうしてパリサイ人の義にまさる義の生活をし、人々が私たちの生きる姿を見て、私たちの天の父をあがめることに至る生活をささげることへと祈り進んで行きたいと思います。